

50704 総評

西躰 かずよし

ひばないろのほね、
の名前を
すこしずつ
おぼえるきみに倚りかかる午後

さいう 石川県

ここでのきみと、語り手との関係はどういったものなのだろう。きみは、近くにいるようで、でも、はっきり語り手との同一化を拒む位置に置かれている。そして、それが作品を緊張感のあるものにしている。倚りかかる午後の時間が、現実と地続きのものとして描かれているにもかかわらず、現実を超えたもののよう感じられるのは、ありそうでないものをありそうなものとして描ききる、書き手の力量によるところが大きいだろう。

保冷剤、頬にあてて
わたしに至る前の
ゆきやなぎ

こはくいろ 大阪府

どうしてわたしに至る前のことを書いたのだろう。語り手の願いは、わたしに至る前へもどることのように見える。保冷剤は、そこに帰るための切符なのかもしれない。

死ぬときは何時も一人だ
アンパンマン
だからごはんはふたりでたべる

マズルカ 山口県

「ごはんはふたりでたべる」ということばは、アンパンマンに向けてのものだろう。だからこそ、そこにはいつもひとりでごはんを食べているだろうアンパンマンの姿が思い浮

ぶ。ちびっこのヒーローはヒーローであるために今日もひとりごはんを食べる。

美しい橋です。

ランナーもみんな

すこしゆっくり走っています。

うたた 岡山県

まるでナレーションの一節のように感じられる。語り手と描く対象との隔たりの大きさが、そうした印象をもたらすのだろう。その隔たりを描くことが、語り手と世界との隔たりを描くことにつながる。描かれた情景が、語り手の今を浮かび上がらせるかのようである。

遠足の日には足音を忘れる

桜庭 紀子 和歌山県

なくしたことに気づかないまま、あるとき不意にそのことに気づくということがある。遠足の日には足音を忘れるというのは、思い出を忘れるのと似ている。忘れたものには、きっと足音だけでない大切なものが含まれていたに違いない。

東北の夜の帳は

少しだけ知ってる夜の匂いと違う

金光 舞 埼玉県

背景には東日本大震災があると思う。書き手は、自身の現在の境遇と東北に横たわる断絶を、鋭敏に夜の匂いを感じ取っていて、被害を受けたものと、そうでないもののあいだに横たわるどうしようもないものは確かにあって。その場合、人は無言になるしかないのかもしれない。そしてその断絶をそのまま引き受けることが、僕たちにできる精一杯なの

かもしれない。

春の駅僕らパステルカラーめく

深谷 健 埼玉県

太宰治は「アカルサハ、ホロビノ姿デアロウカ。(※)」と書いた。確かにこの作品の春の駅も、パステルカラーめく僕らも、屈託なく明るい。それらの明るさは、それが永遠ではないことを、そしてあまりにも短いものであるのを暗示するかのようで、どこかはかなげに見えるのは気のせいだろうか。

※ 惜別 新潮文庫 右大臣実朝より

花冷えの
エクレア
二つ

海月荘

ほしはかせ 群馬県

「くらげそう」と読むのだろうか。それとも「みづきそう」と読むのだろうか。いずれにしても宿の名前だろう。肌寒い春の日に置かれた二つのエクレアと、どこかの宿との距離は、遠いようにも近いようにも感じられる。その微妙な距離は、自身の思い出との距離を表しているのかもしれない。

やわらかい諦めがあり
飛行機は
ゆきを見つめて速度を落とす

川上 真央 東京都

この人は見る人なのかもしれないと思う。見てそこに自身を投影するという風に。たとえばそれは、速度を落と飛行機だったりする。「横顔のきれいな人／を想うとき／胸をさまよう土星のひかり」という歌では、湧き上がる感情は、視覚的な「胸をさまよう土星のひかり」へと集約される。そこに明確な主張があるわけではない。日々のなかで生まれるやわらかな感情を、ひとつの風景に変えて詠うとき、新たに見えてくるものがあるに違いない。

力加減がむずかしい
蠅のはねを透けるだけの
ひかりのなかでねむるとき

高祖 にとまご 岡山県

そのねむりは、とてもあやうい均衡のなかにあって、それ自体が作品のモチーフとなっている。それが「力加減がむずかしい」というふだんのことばとして表わされると、実感をともなうあやうさになる。語り手をかすかなひかりとともに包み込んでいるのは、まだかたちにならない未来への不安なのかもしれない。